論　文

# スピリチュアリティーの5因子構造モデル

## サイコシンセシス教育評価尺度の開発より

尾崎真奈美

# Spirituality: Its 5 Factor Structure

## From Development of an Assessment Scale on Psychosynthesis Education

Manami OZAKI

**Abstract**

The 5 factor structure of Spirituality was proposed through an exploratory factor analysis of a Psychosynthesis Assessment scale focused on spiritual education. The 5 factors are as follows.

① Act of Will; which is well described in Psychosynthesis.

② Joy; which comes from within, independent from any outside event or situation.

③ Awareness for a transpersonal dimension.

④ Morality/Ethics determined obligatory

⑤ Sensitiveness for personal relations.

This 5 factor model of Spirituality distinguishes the Authentic Spirituality and false spirituality (factor, 4 and 5) clearly.

## 1．スピリチュアル教育とその評価

スピリチュアル教育の実践がさまざまな分野で行われているが，実証的に評価分析するツールがなく，比較検討が難しい状況である。スピリチュアルなアプローチに対する効果については，これまで臨床的な場面で，個々に主観や語りを重要視するナラティブな立場から質的検討が行われてきた[1]。今回，スピリチュアリティーの二つの側面として言及されることの多い「垂直方向の実存，生きる意味」と，「水平方向のつながり意識」の二つを構成概念として捉え，質問紙を作成した。その中で，ウイルバーによるスピリチュアリティーの「前・超の虚偽」[2]を明らかにする試みも行った。また，スピリチュアリティーと，サイコシンセシスで強調される「意志のはたらき」[3]，対人関係深度，自尊感情との関連も検討した。

スピリチュアリティーに関しては，概念の統一が見られない状態であり，そのために尺度の構成も困難な状況である。中村[4]は，主にマズローの自己超越の概念から自己超越傾向尺度を作成し項目分析をしている。その結果次のような因子を挙げている。①生の意味と目的，②霊性の自覚，③命の永続性，④自然との一体感，⑤無償の愛，⑥個人性，⑦自我固執，である。この尺度は，信頼性妥当性もさまざまな方向から検討が加えられており，一般日本人におけるスピリチュアリティー，あるいは自己超越傾向を測るための有益な尺度になっていると言えよう。

また，田崎[5]も，WHO においてスピリチュアルヘルスがどのような意識で使われているかの調査を行い，次のような4領域を挙げている。第一領域として，人間関係，特に受容的で愛他的な関係と読み取れる。次に，第二領域　生きていく上での規範，さらに第三領域，超越性としては，以下のさまざまなものが含まれている。希望／楽観主義，畏敬の念，内的な強さ，人生を自分でコントロールすること，心の平穏・人生の意味。絶対的存在との連帯感，何か（絶対的存在，神，医療関係者等）が自分の人生をコントロールすること，諦念・愛着，無執着，死と死にゆくこと，無償の愛，である。そして第四領域では，特定な宗教に対する信仰を挙げている。このうち，第三領域に関する超越性を眺めると，SOC 概念，楽観主義ほかさまざまな概念が存在しており，スピリチュアリティーの捉えにくさを物語っているようである。

エルキンズは，非宗教的な見地からスピリチュアリティーを定義し，多次元的構成要素を持つとしている。それらは次の9つにあらわされている。

①超越的次元　②人生の意味と目的　③人生の使命　④生の神聖さ　⑤霊的価値対物質的価値　⑥利他主義　⑦理想主義　⑧悲劇的なものへの自覚　⑨霊性の報い[6,7]

本研究の目的は，大学授業プログラムにおけるスピリチュアル教育実践の評価測定尺度開発である。この授業は心理学関連科目の「人間関係の心理」というタイトルの授業である。これはその理論的根拠をトランスパーソナル心理学の，特にホリスティック教育の立場においているものである。ホリスティックな思想は，現行のさまざまな立場や主張を比較競争させたり否定するものではなく，むしろ対立するように思われる主張をそれぞれの適応範囲や位置を明らかにすることによって結びつけ対話を促すものである。つまり，次のような事柄に対するつながりやかかわりを強調するものである。すなわち，①論理的思考と直感，②心と体，③知のさまざまな分野，④個人とコミュニティー，⑤地球と自分，⑥自己と自我，である。このような枠組みで講義（知的学習）とワーク（体験学習）を連携させて行う授業である[8]。

具体的には，サイコシンセシス理論を基本として，コスモロジー教育，ライフスキルプログラム，プロジェクトアドベンチャー，エンカウンターグループワークなど，既存の様々なワークを応用したものとなっている[9,10]。つまり，スピリチュアリティー教育と言いながらも，直接的には自己超越を目指したものではなく，サイコシンセシスで言う，パーソナルセルフの指揮の下で，自我が統合されていくのをまず目標とする。すなわち，コスモロジー理論で知的・論理的なアプローチを行い，ライフスキルプログラムによって実際的なスキルを身につけ，プロジェクトアドベンチャーや，エンカウンターグループワークなどで蓄積されたグループワークの知恵を使いながら，学生の反応，準備状態を観察しながら，イメージワークなどを行うと

いう手順である。

## 2．サイコシンセシスにおける意志のはたらき

意志については，哲学者，心理学者，教育者，宗教家などがさまざまな立場で考察を加えているが，ここで扱うのはサイコシンセシスにおける意志である。サイコシンセシスの創始者であるアサジョーリは，スピリチュアルな状態の研究を行う過程の中で，個人的な意志をより大きい意志（スピリチュアルなもの）の前に放棄するためには，まず個人的な意志を持たなければならないとしている。すなわち，高次の意志と交わり溶け合うという至高の瞬間に達するためには，バランスがとれた，個人的な意志が浄化され強化されていなければならない。そうでなければ，自らの未熟さと神経症的な傾向の中にますますおぼれていくことになる，としているのである[11]。サイコシンセシスでは，意志を経験的で現象学的なものとして取り扱っている。意志を訓練することは，目標を設定して，そこに到達することを学ぶ手段の一つであるとしている。しかしながら，本能的欲求や本来の感情の抑圧をともなう辛いものとはみなしていない。むしろ，意志は，真の自分になることができる喜びを導くものである，としている[3]。

意志とは，選択する能力と言いかえることができるかもしれない。意志の欠如した状態とは次のようなものであるとフェルッチは説明している[12]。うつ状態，不安状態，怒りっぽいといった精神状態である。このような精神状態は自分の人生を自分で管理することができない苦悩によって起こる場合であることが多い。自分が無力であると感じること，自分は適切な対応ができないと思い込むこと，やりたいことをやろうとしないこと，自分で自分を被害者にすること，いいえと言わないこと，など，意志によって生産的なことを選択できるのにかかわらず，しないで疲れ果てているのである。このような状態から，本来の，喜びに満ちた意志のはたらきを訓練することが，サイコシンセシスの目的のひとつである。

サイコシンセシスでは，完全に発達した人間の意志には，①強い意志，②たくみな意志，③善い意志，④トランスパーソナルな意志，があるとしている。

まず，「強い意志」について，これは誤解されることが多いため，これはただひとつの側面であり，こればかりが強調されると害を及ぼすことがあるとしている。「たくみな意志」とは，最小のエネルギーによって望む結果を得る能力であり，これは自分の内面的な欲求，習慣，機能などとそれらの相互関係をよく知り，特定の状況で一番自分らしいものを活性化するものである。「善い意志」とは，倫理観や愛に基づいた正しい目標を選びとることである。アサジョーリは，強いたくみな意志を悪い方向に使うと，作用，反作用の法則によって，害を及ぼす人は害をこうむることになると，ヒットラーなどの例を挙げて説明している。「トランスパーソナルな意志」とは，多くの人は気づかないか，存在を否定するが，体験的に歴史上の人物も報告している，別の次元での気づきである。これは，スピリチュアルな次元ともいわれる。トランスパーソナル心理学では，これを宗教に限定することなく，人類に普遍的なものとして研究が進められている。マズローによると，高次の欲求に関連する事柄であり，次のような言葉で表現されるものである。「メタ欲求，究極の価値，結合力のある意識，至高体験，エクスタシ

ー，神秘体験，存在価値，本質，至福，畏敬，驚異，自己実現，究極の意味，自己の超越，トランスパーソナルなもの，日常生活の聖化，ひとつであること，宇宙的気づき，宇宙的はたらき，個体および種全体に及ぶシナジー，人間間の最大のエンカウンター，超越現象，最大限のセンサリー・アウェアネス，応答性と表現，そしてそれらに関連する概念，体験，活動」[10]これらがトランスパーソナルな意志で扱う次元であり，最終的にはパーソナルセルフとトランスパーソナルセルフが融合していくとしている。

また，アサジョーリは，意志の特性として次の７つの様相を示している。

① エネルギー：「強い意志」であらわされるものである。

② 熟達：「たくみな意志」であらわされるものである。肉体的，心理的なエネルギーの，建設的な方向性を持った利用を目標とするものであり，抑圧や我慢とはまったく反対の作用である。

③ 集中力

④ 決意：意志決定といわれるものである。断固として，迅速に決断することである。

⑤ 持続性：耐久力・忍耐とも関係しており，実存的視点から苦難を受容する心意気とも呼ばれる。

⑥ 自発性：勇気を持って危険をおかし，冒険を行うことである。

⑦ 組織化：さまざまな心理機能を強調させるものであり，パーソナルな意識の中心である自我とトランスパーソナルセルフの意志を統合した状態に導くものである

## ３．サイコシンセシス教育評価尺度の作成と評価法

サイコシンセシス教育評価尺度は，表１のような構造を持つ。以下，各尺度の説明を行う。

① 自尊感情尺度

これは，過去の構成的エンカウンターグループ的なワークによる教育において，改善が認められている項目であり，スピリチュアル教育の直接的効果として目的としている一つの概念である。今回は，自尊感情と，スピリチュアル尺度との関連を見ることで，表面的な自尊感情の高まりであるのか，内的な深いところからの実感であるのかを差別化する尺度としても有効であると考えた。山本・松井・山城による自尊感情尺度[11]を参考に抜粋し，表現をわかりやすく変更した。

② 対人関係深さ（自己開示度）尺度

自尊感情と同様に，この授業において目的としている人間関係の改善を直接評価する尺度である。岡田による友人関係尺度[15]を参考にした。表面的な浅い関係から，自己開示をともなった深い関係へとの変化が期待される項目である。

③ スピリチュアル尺度

これが本質問紙の中核となる部分の一つである。酒井・山口・久野による価値志向性尺度[16]，クラムボウ（J. C.Crumbaugh）とマホーリック（L. Maholick）作成，岡道哲雄監修，PIL

**表1**　サイコシンセシス教育評価尺度

| 構成概念 | 項目数 |
|---|---|
| ①自尊感情尺度 | 6 |
| ②対人関係深さ（自己開示度）尺度 | 6 |
| ③スピリチュアル尺度 | 6×5 |
| A：世界観（水平方向） | 6 |
| B：実存意識・むなしさ（垂直方向） | 6 |
| C：道徳観 | 6 |
| D：喜び | 6 |
| E：前個的スピリチュアリティー | 6 |
| ④意志のはたらき尺度 | 18 |
| ⑤ライスケール | 3 |
| 合　計 | 63 |

研究会編訳によるPILテスト日本版[14]，中村の自己超越傾向尺度[4]，田崎らによるWHOスピリチュアリティーの分析[5]などを参考に，アサジョーリの記述に添う形でスピリチュアルな概念を水平方向と垂直方向に分類し，下位概念を世界観と実存意識で構成した。また，この二つの概念をつなぐものとしての道徳観をも加えた。また，表面的な自我の働きで見かけ上の自己実現を表しているものと，本来のものを区別する尺度として，喜びの尺度を使うことにした。つまり，超自我と，トランスパーソナルセルフとの違いを明らかにさせる試みである。さらに，ウイルバーによる前・超の虚偽を明らかにするため，前個的スピリチュアリティーと考えられる項目を配置した。これによって，魔術的な思考や，自己肥大感といった幼児的なスピリチュアリティーと，本来目指しているトランスパーソナルセルフの元への統合というスピリチュアリティーとが区別できると考えた。

④　意志のはたらき尺度

サイコシンセシスにおける意志のはたらきのさまざまな側面を考慮して，評価尺度を作成した。時空を超越したスピリチュアルなものは数値化できず，質問紙で捉えられるのは，意識したレベルの主観的なものに過ぎないという立場がある。この質問紙では，トランスパーソナルセルフへの統合を目指した過程で，パーソナルセルフへ統合される段階を査定することを主な目的とした。そのために，「たくみな意志」という概念がサイコシンセシスに特徴的な視点であることから，それを含んだ項目が多くなっている。また，それぞれの意志のはたらきは明確に分離することはできず，各項目もいくつかの意志の様相が含まれているが，全体としてアサジョーリのいう意志のはたらきを網羅させるような質問項目とした。「スピリチュアルな意志」については背景としての概念にとどめたが，表現されている具体的な状況の中でも，トランスパーソナルな視点が見え隠れしていると判断した項目を採択した。

⑤　ライスケール

信頼性を検討するために入れた項目である。スピリチュアルな事項に関して，通常では不可能と思われるような態度や感情も存在するが，現象学的にありえない態度でありながら理想とされがちなものを，作為的にスピリチュアリティー尺度の，ここかしこにちりばめた。

評価法は5件法とし，それぞれ，自分に当てはまると思うかどうか，「5．よくあてはまる」から「1．まったくあてはまらない」まで該当する数字に丸をつけさせ，それぞれのカテゴリー別に点数化する。なお，対人関係深度の項目は得点が高いほど表面的な人間関係であることを示す，つまりサイコシンセシス尺度全体では逆転項目として扱う。

## 4．サイコシンセシス尺度の方法・信頼性・妥当性検討

質問紙は，年齢性別などを聞くフェイスシートのあとに，表1のような項目から構成されている。

信頼性の検討として，まず，固体内変動の安定性を見るために再テスト法を行った。心理学概論を受講する学生を対象として，授業中に3週間後に2回目の調査を実施し，その一致度を確認した。匿名式の調査であるため，1対1の対応までの確認はできなかったが，各項目得点，カテゴリー別得点，総合得点のそれぞれの前後における平均値を比較した。次に，内的整合性を確認するために，クロンバックのアルファー係数を算出した。また，回答の信頼性を測るライスケール得点を算出した。因子分析の過程で，ライスケールとしてあげた項目25がむしろ，「喜び尺度」の関連性が高いという結果が導かれたため，今回は，項目13，19の得点合計を，ライスケール得点とした。

構成概念妥当性に関しては，サイコシンセシスアンケート全体で探索的因子分析を行い，下位概念構成を確認した。使用した統計解析プログラムはSPSS for Windows 10.07Jである。因子抽出の手順は，固有値1.0以上の因子を抽出し，因子間に相関があるとの前提のもとで，因子軸の回転にはバリマックス回転を6回行った。

## 5．結果

①信頼性の検討

再テスト法による信頼性の検討であるが，各項目の平均値を前後で比較したところ，すべての項目で，1パーセントの有意水準で有意差が見られなかった。相関が取れなかったためにこのような代替法で評価したが，信頼性はほぼ確認されたとしてよいであろう。また，クロンバックのアルファー係数は，尺度全体で0.765という結果が得られた。サイコシンセシス尺度全体の内的整合性もほぼ確認できたと考えられる。

②構成概念妥当性の検討

探索的因子分析の結果5つの因子が抽出された。二つ以上の因子にまたがって0.40以上の因子負荷量を与えている項目を除き，独立して因子負荷量が.40以上の項目群について因子の命

名をした（表2）。

因子分析の結果は，今回の被験者において，サイコシンセシス教育評価尺度を構成する要素に5つの因子が存在することを示している。第1，2，3因子は，サイコシンセシスの3つの側面を表していると考えられる。つまり，順に，第1因子「パーソナルサイコシンセシス度」，言葉を変えると，健全な自我の確立。自存感情，自信に満ち溢れた意志の働きなどである。第2因子「内発的幸福感」，自尊感情とともに周りとのつながりを意識しており，喜び尺度がこちらに吸収された形となっている。第3因子「狭義のスピリチュアリティー」，これは中村の自己超越傾向尺度の主要4因子とほぼ重なり，従って，「自己超越傾向」と名づけてもよいであろう。第4因子は，生真面目で硬直した道徳意識，「超自我の縛り」，第5因子は「気遣い」あるいは表面的人間関係をあらわしていると解釈できる。この二つの因子は，スピリチュアルなものと誤解される可能性が高いが，サイコシンセシス教育を抑制する因子である。

サイコシンセシス教育評価尺度の下位概念にはこのように多元性があり，上位3つはスピリチュアリティーに貢献する因子，二つは拮抗する因子であることが確認された。

③はじめに想定した下位概念と抽出された因子との比較

まず，自尊感情尺度は，主に，第1，第2因子に吸収された形となった。対人関係深度の尺度は，「表面的人間関係」として，第4因子に現れた。道徳性は，6項目中3項目が第5因子として，「超自我の縛り」というネガティブな因子として抽出された。「スピリチュアリティー」に関する項目としては，「人生観（水平）」は，第2因子を中心に，「喜び」，「自存感情」を含みながら，「つながり意識，内発的幸福度」として検出された。「世界観（垂直）」は，第3因子で網羅されている。これは，「狭義のスピリチュアリティー」，あるいは，「自己超越傾向」と命名されたが，前個的霊性の項目から3項目が含まれている。「意志の働き尺度」は，第1因子として，「パーソナルサイコシンセシス尺度」として，一部「自存感情」も含みながら収束している。前個的項目6つのうち，3項目は前述のように狭義のスピリチュアリティーに組み込まれ，残りの3項目は，残余項目として残った。ライスケールに関しては，ひとつの項目が「喜び尺度」に加えるほうが妥当であると考えられた。それ以外の2項目に関しては，残余項目となっている。

## 6．考察

因子分析の結果，第一因子として「パーソナルサイコシンセシス度」が取り出されたことは，この尺度の特徴を現している。この因子は，自我（パーソナルセルフ）が確立して，その自我の元に統合された，積極的な意志の働きを伴った自信に満ちたパーソナリティーという特徴が現れている因子であると解釈できる。これは，超越，スピリチュアリティーの段階ではなく，現実的な生活レベルでの能力，あるいは状態を測定するものである。ジェームズはトランスパーソナルな正しさを測定する指標として，「日常生活の道徳的・美的性質を増加し，人々の相互作用を改善する，その体験能力によってのみ測定しうる」[17]

と述べている。この論に立つと，この因子における妥当性は高いということになるであろう。

**表2**　サイコシンセシス尺度の因子分析結果（N＝813）

| 項目 | 因子不可量 | | | | |
|---|---|---|---|---|---|
| **第1因子 パーソナルサイコシンセシス度**（$\alpha$＝0.780） | | | | | |
| 49. 大多数の人が間違ったと思われる行動をしているときに，自分ひとりでも自分の正しいと思うことを実行する | **0.612** | -0.123 | -0.003 | -0.048 | -0.206 |
| 61. 集団的に恐れやパニックになっている状態でもその影響から身を守り，本当になされることが何かを静かに明確に見抜く | **0.538** | 0.153 | -0.008 | -0.064 | 0.020 |
| 55. 正しいと決断したことに対しては，何回失敗しても信念を持ってやり続ける | **0.529** | 0.189 | 0.141 | 0.132 | -0.093 |
| 54. 不安や恐れがあるときでも，決めなければならないときには勇気を持って決断する | **0.524** | 0.169 | 0.028 | -0.083 | 0.026 |
| 46. やろうと決めたことを実行中に，ほかのことや人からの誘惑に抵抗してやり続けることができる | **0.504** | 0.047 | 0.040 | 0.203 | -0.093 |
| 52. 退屈なつまらない仕事でも，必要なことは淡々と実行する | **0.477** | 0.040 | -0.002 | 0.068 | 0.128 |
| 48. 時間の観念のない人たちとのおしゃべりに，丁寧にしかも断固として断ることができる | **0.448** | 0.041 | -0.078 | 0.064 | -0.171 |
| 57. 目的や価値があるときには，あえて危険や冒険をおかすことをいとわない | **0.442** | 0.074 | 0.076 | -0.163 | -0.136 |
| 3. 自分らしくいることを大切にしている | **0.424** | 0.173 | 0.130 | -0.221 | 0.180 |
| 53. 一人静かに，長い間ひとつのことに集中していることができる | **0.414** | 0.011 | 0.023 | -0.057 | 0.139 |
| **第2因子　内発的幸福感**（$\alpha$＝0.735） | | | | | |
| 23.（R）自分がなぜ生きているのか，時々わからなくなる | 0.141 | **0.612** | -0.143 | 0.090 | 0.073 |
| 25. 生まれてこのかた，いつも喜びに満ち溢れている | 0.091 | **0.548** | 0.140 | -0.037 | -0.067 |
| 45.（R）ストレスが多くゆったりとした気持ちになれない | 0.110 | **0.548** | -0.172 | -0.181 | 0.009 |
| 60. 攻撃的，不安，うつ，落胆などのネガティブな感情が起きたときに，断ち切って有益な方向にエネルギーを集中できる | 0.291 | **0.513** | -0.090 | 0.040 | 0.038 |
| 2.（R）自分自身に自信が持てない | 0.294 | **0.497** | -0.150 | 0.018 | -0.198 |
| 43. 目覚めたときに，今日一日がどんな日になるか期待でわくわくしている | 0.077 | **0.462** | 0.224 | 0.005 | -0.089 |
| 1. 欠点もあるが自分ことが好きである | 0.290 | **0.406** | 0.202 | -0.123 | 0.060 |
| 26. もしできるなら，今のこの人生を何度でも繰り返したい | -0.047 | **0.406** | 0.059 | -0.151 | -0.053 |
| **第3因子　スピリチュアルな感情**（$\alpha$＝0.735） | | | | | |
| 37. 何かに祈ることがある，又は，祈りたい気持ちになる | -0.126 | 0.034 | **0.570** | 0.100 | 0.092 |
| 32. 自然や宇宙の偉大さの前に，謙虚な気持ちになる | 0.074 | 0.019 | **0.566** | 0.171 | 0.072 |
| 34. 生命の素晴らしさ，神秘性に，畏敬の念を感じる | 0.100 | 0.090 | **0.515** | 0.181 | 0.091 |
| 30. 何か，意味があって生かされているはずだと感じる | 0.117 | 0.200 | **0.484** | 0.231 | -0.042 |
| 40. 踊りだしたくなるような気分になることがある | -0.039 | 0.215 | **0.471** | -0.209 | -0.091 |
| 31. 自分が生まれる前も死んだ後も続いていく永遠の時の流れを感じる | 0.104 | 0.001 | **0.460** | 0.162 | -0.022 |
| 22. 悪いことをすると天の罰が当たる | -0.149 | 0.086 | **0.460** | 0.131 | 0.182 |

| 項目 | 因子不可量 | | | | |
|---|---|---|---|---|---|
| 39. 一人静まったときなどに，内なる声というか，意思のようなものを感じることがある | 0.073 | -0.120 | **0.460** | 0.061 | -0.195 |
| 35. この世界には人間の力をはるかに超えた大いなるものの力が働いていると思う | 0.144 | -0.060 | **0.457** | -0.013 | 0.111 |
| 44. 空の雲や星を見上げてほっとすることがよくある | 0.091 | -0.018 | **0.452** | -0.079 | 0.068 |
| 33. 人間の勝手な振る舞いに対して，自然界が怒って反撃しているとおもう | -0.078 | -0.009 | **0.449** | 0.095 | 0.008 |
| 38. 言葉に出したことが実現してしまうのは本当だと思う | 0.075 | 0.159 | **0.402** | -0.054 | -0.005 |
| **第4因子　超自我の縛り**（$\alpha=0.650$） | | | | | |
| 18. (R) ばれることがなければ，止められている事でも楽しかったらやるだろう | 0.003 | -0.037 | 0.042 | **0.511** | -0.071 |
| 62. 健康のために，腹八分目や酒タバコを控えたり，夜更かしなど不健康な行動をコントロールする | 0.153 | 0.088 | 0.143 | **0.409** | -0.022 |
| 21.（R）何といっても自分が楽しいのが一番だ | 0.003 | -0.144 | 0.088 | **0.402** | -0.017 |
| **第5因子　気遣い**（$\alpha=0.632$） | | | | | |
| 12. 互いに傷つけないよう気を使う | -0.069 | -0.102 | 0.074 | 0.123 | **0.546** |
| 7．対人関係において，相手の考えていることに気を使う | 0.134 | -0.028 | 0.161 | 0.133 | **0.511** |

ただ，項目47が，逆転した結果となっている，つまり，意志の働きが，この項目だけ「己に勝つ」式の厳しい意志の力を連想させるものとなっている。これは，サイコシンセシスで強調する，巧みな意志ではない。己に勝つという精神は，行き過ぎると自虐的となるが，ある程度はセルフコントロールの指標として有益でもある。行き過ぎたコントロールでなければ，むしろ肯定的に捉えられる場合もあると解釈してよいのではないだろうか。

自存感情の項目のうち，半数がこの因子に収束されたことから，パーソナルサイコシンセシス度が高いという特徴は，自存感情が高いという特徴と関連があることも示している。自存感情の項目は，この第1因子と，内的幸福感を表す第2因子でほぼ吸収されつくしている。自存感情は，サイコシンセシス度の下位概念ではなく関連概念として今回挙げられたのであるが，ある意味では，サイコシンセシスにおける特徴的な概念なのかもしれない。

当初，水平的なスピリチュアリティー，つながり意識としてあげた項目は，喜び尺度の過半数を伴って，主に第2因子として抽出された。これは，スピリチュアリティーに関して大きな示唆を与えると考えられる。つまり，今回の被験者層においては，内発的幸福感といった意識が，スピリチュアリティーの大きな特徴を現していると考えられるからである。これは，中村の主張する，自己超越傾向に関連すると考えられる「主観的幸福感」と一致する結果であろう。

垂直的なスピリチュアリティー，世界観としてあげた項目は，狭義のスピリチュアリティーとして第3因子にすべて吸収されている。中村の開発した「自己超越傾向尺度」の主要因子が網羅されている項目となっており，一般人における狭義のスピリチュアリティーをあらわす項目と言ってよいであろう。前個的スピリチュアリティーと考えられる項目から3項目入っていることを考えると，この自己超越傾向は，前個的スピリチュアリティーを含む可能性があると

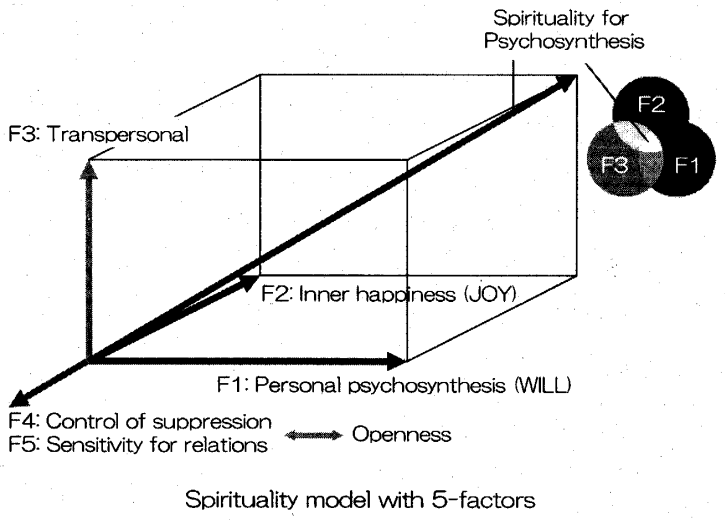


**図1**　サイコシンセシス教育評価尺度

考えられる。何をもって前個的と考えるかどうかは議論の分かれるところである。非科学的アニミズムに関しても，比喩的，象徴的にそのような表現を使っているのであって，科学的，論理的思考は奪われていないのかもしれない。そのあたりの検討は今後の研究に待たれるところである。今の時点では，第1因子得点との相関を見ることによって，その疑問に間接的に答えることができるであろう。つまり，第1因子においては自我の確立した成熟したパーソナリティーが見られるために，その得点と，この狭義のスピリチュアリティー得点の相関が高いということは，表現の上で前個的とみなされる項目も，実は超個的な概念であることが推定できると考える。今回は，自己超越傾向のなかに，前個的，つまり自我の確立以前の世界観と思われる項目が入っていることを言及するにとどめ，詳細は今後の研究に譲りたい。

このような表現上の問題は，ライスケールの25番にも現れた。「生まれてこのかた，いつも喜びに満ち溢れている」ことは，厳密には人間としてありえない状態であるが，第2因子の「内発的幸福感」に大きく寄与している項目である。抑圧，否認といった防衛機制によって人生のネガティブな面を感じない場合は存在するであろう。その場合には，解答者は意識的にうそをついているわけではない。「内発的幸福感」の性質を考える際に，ロロ・メイによるトランスパーソナル心理学に対する批判「人間性の暗部をとび超えて超越へと向かい，ねたみ，苦悩，罪悪感，嫉妬などの感情を無視している，楽天的過ぎる」を吟味する必要がある。

## 7．結論

以上，スピリチュアリティー教育評価尺度の開発にあたって，サイコシンセシス概念を中心に尺度開発を行った。サイコシンセシス教育評価尺度と名づけられたこの尺度は，このように，現実的なレベルでの能力を測る第1因子を中心に，内発的幸福感という状態を表す第2因子，超越性を測定する第3因子と，見かけ上のスピリチュアリティーと考えられる，表面的人間関係（前個的），硬直した正義感（個的）を第4，5因子として構成されている。このことによ

り，健康的なスピリチュアリティーと，見かけ上の危ういスピリチュアリティーをスクリーニングするための有益な尺度であることが示された。(図1)

**文献**


1．奥健夫・水木太喜・井上誠哉・尾崎真奈美：心と生命のホログラムースピリチュアリティーと超弦の出会い，三恵社，2005.

2．Wilber, K., Sex, Ecology, Spirituality The Spirit of Evolution: Shambhara, 1995（松永太郎訳『進化の構造』，春秋社，1998).

3．Assagioli R: The Act of Will, Psychosynthesis Institute, 1973（国谷誠朗，平松園枝訳：『意志のはたらき』，誠信書房，1989)

4．中村雅彦：自己超越と心理的幸福感に関する研究－自己超越尺度作成の試み，愛媛大学教育学部紀要，45(1)；59－79，1998

5．田崎美弥子・マツダ正己ほか：スピリチュアリティーに関する質的調査の試み－健康およびQOLの概念のからみのなかで．日本医事新報，4036：24-32，2001.

6．Elkins DN Hedstrom L et al.: Toward a humanistic phenomenological spirituality: Definition, description, and measurement. Journal of Humanistic Psychology, 28: 5-18, 1988. DN，エルキンズ：(大野純一訳：『スピリチュアル・レボリューション』，コスモスライブラリー，2000).

8．吉田敦彦：ホリスティック教育論，日本評論社，1999.

9．尾崎真奈美：教育現場におけるスピリチュアルヘルス，トランスパーソナル心理学・精神医学5(1)：2004.

10．尾崎真奈美・石川勇一・松本孚：相模女子大生のスピリチュアリティー特徴と「スピリチュアル教育」マニュアル作成の試み，相模女子大学人間社会学科紀要，2005.

11．Assagioli, R., Psychosynthesis: Psychosysthesis Research Eoundation, 1965（国谷誠朗・平松園枝訳『サイコシンセシス』，の誠信書房，1997).

12．Ferrucci: In Assagioli, R., Psychosynthesis: Psychosysthesis Research Eoundation, 1965（国谷誠朗・平松園枝訳『サイコシンセシス』，誠信書房，1997).

13．Maslow AH: Toward a Psychology of Being, Van Nostrand Reinhold Company Inc. 1968（上田吉一訳『完全なる人間―魂の目指すもの』，誠信書房，1998).

14．山本・松井・山成：自尊感情尺度，1982，堀洋道監修，山本眞理子編，心理測定尺度集Ⅰ，サイエンス社，2001.

15．岡田：友人関係尺度，1995，堀洋道監修，吉田富二雄編，心理測定尺度集Ⅱ，サイエンス社，2001.

16．酒井・山口・久野：価値志向性尺度，1998，堀洋道監修，吉田富二雄編，心理測定尺度集Ⅱ，サイエンス社，2001.

17．James, W.: The varieties of religious experience. Longmans, 1902（ウィリアム・ジェームズ『宗教的体験の諸相』，日本教文社，1965).